

各国から緊急援助隊

助けたい「念で

東日本大震災の被災地には、この1カ月 日本人男性に出会った。世界各国から緊急援助隊が派遣された。慣れない寒さ、生存者を発見できない無念さなどの中、救助作業を支えたのは「助けたい」という一念。任務を終えた隊員らは「被災地の復興」に思いをはせた。(ハバロフスク、東京共同＝平林倫、久下和宏)

「何とか生存者が見つけたかったが、遺体を収容することしかできなかった」。多くの救助隊員、約160人を派遣したロシア。極東ハバロフスク隊50人のトップを務めたアレクサンドル・コロリコ隊長(52)は帰国後の6日、地元事務所で無念さをにじませた。

心の苦しみ

ロシア隊は3月中旬、宮城県石巻市で捜索活動などを行い、4日間で112人の遺体を収容した。「大変な現場になる」と心の準備はできていたが、ひどく悲しい状況だった。

放射線物質の測定を担当したキリル・ゴロホフ(31)は現場で、3本

「日本語は理解できなかったが、3歳の子供を亡くしたと分かった。心の苦しみを誰かに聞いてほしいかのようだった」

静かに聞き入ったとい



トルコの緊急援助隊(右側)に頭を下げる東日本大震災の被災者(宮城県内)トルコ隊提供

被災地復興「確信している」

「電気や水はなく、慣れない寒さの中で難しい作業だったが、7遺体を発見し、家族の元に返すことができた」。4月6日までの約10日間、宮城県女川町で活動したインドの国家災害対応隊(NDRF)。46人の隊を率いたアロック・アワステイ隊長(41)は7日、東京の大使館内で振り返った。

全て手作業

重機を持ち込まず、全て手作業で通した。それが何より重視していた「遺体を傷つけないこと」につながった。

最も厳しい現場

4月8日までの約20日間、宮城県七ヶ浜町などで活動し4遺体を収容した32人のトルコ隊。「こ

「仮設住宅の建設が始まるなど、早くも復興に向けて動きだしている」と驚くムムジュ隊長。帰国を前に、早期復興に期待を示した。

外国から派遣された主な緊急援助隊など

※外務省などによる(4月11日現在)

| 国 | 人数 | 活動場所 | 期間 |
|----------|-------------|-----------|--------------|
| 韓国 | 救助隊員 107人 | 仙台市 | 3月14日～23日 |
| 米国 | 救助隊員 144人 | 岩手県大船渡市など | 3月15日～19日 |
| 中国 | 救助隊員 15人 | 岩手県大船渡市 | 3月14日～20日 |
| ニュージーランド | 救助隊員 52人 | 宮城県南三陸町 | 3月16日～18日 |
| ロシア | 救助隊員 約160人 | 宮城県石巻市 | 3月中旬に4日間 |
| トルコ | 救助隊員 32人 | 宮城県七ヶ浜町など | 4月8日までの約20日間 |
| インド | 救助隊員 46人 | 宮城県女川町 | 4月6日までの約10日間 |
| イスラエル | 医療支援チーム 53人 | 宮城県南三陸町 | 3月29日～4月10日 |

繰り返した。アワステイ隊長は帰国前にエールを送った。「震災前より素晴らしい街に生まれ変わること願っている」

大使館で「被災者を助けたい」という思いがよりどころだったと話した。日本人の優しさがこの病院では負傷した隊員の治療の受け取りを拒まされた。「助けに来てくれた人だから」。車両の夕